

ソーシャルインクルージョンとコミュニティアム



新井浩 (あらいひろし)

彫刻家。2008年より福島大学教授。専門は彫刻。2019年より福島大学附属特別支援学校長。本ディスカッションでは福島大学附属特別支援学校の取り組みから、多様性を認め合える社会への可能性を投げかけた。



上島雅彦 (うえじまさひこ)

1998年より財団法人竹田綜合病院で勤務。専門はてんかん、気分障害、不安障害、地域移行支援。地域との連携事業にも取り組む。本ディスカッションでは、精神科医療の歴史と現在の課題などについて論じた。



久保田翠 (くぼたみどり)

障がいのある長男の出産を機に、2000年にクリエイティブサポートレッツ設立。2004年NPO法人化。2008年より、個人の熱意、やりたいことをアートの手法を通してサポートを行うたけし文化センター事業をスタート。2010年障害福祉施設アルスノヴァを設立。2014年認定NPO法人化。これまでの活動により平成29年度(第68回)芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。



博物館は本来、年齢・性別・国籍・信条を異にするどなたでも利用できる文化施設です。さまざまな人々が学びを通じて、出会い、交流する開かれた場でもあります。すべての方に博物館をご利用いただくためには何をすれば良いのか。博物館をみんなのものにすることは、「いのち」と「くらし」の尊厳を考える一つのアプローチ。そのためにもう一度語り合い、考える機会としました。

あなたの博物館

すべての人が集う場に

オープンディスカッション



入館者20

A4 環境の変化と生活

この展示は、
縄文時代の生活様式を再現したもので、
当時の人々がどのように生活していたかを
学ぶことができます。
また、当時の道具や生活用具も
展示されています。



事務局・小林めぐみ

この事業ではテーマを設けてみなさんで気軽に話をしようとオープンディスカッションを行っています。今日は「あなたの私の博物館、すべての人が集う場に」というタイトルです。博物館や美術館、ミュージアムは、本来、みなさんの場所だと思っていますので、県立博物館を素材にそうならない部分、もつとできることなど、博物館へのダメ出しも含めてお話しただけたらと思っています。

講師の方三人をお招きいたしました。最初にお話しいただきますのが福島大学教授の新井浩先生です。

新井浩

新井です。はじめまして。よろしくお願います。

小林

よろしくお願います。もうお一方が会津若松市内の竹田綜合病院精神科長の上島雅彦先生です。

上島雅彦

上島です。よろしくお願います。

小林

お願います。そして静岡県浜松からお越しいただきました認定NPO法人クリエイティブサポートレッツの理事長の久保田翠さんです。

久保田翠

がいます。もちろん高等部になってくるとパソコンも使えるようになってきますし、検索も自分でどんどんやっていく子もいます。私は、行くまでわからなかったですけど、色々なことを街なかで話していたり、叫んでいたり、そういう姿は特別支援学校では当たり前、その子にとっての合理的な姿なのだとよくわかりました。さらに特異な行動というのはその子にとってストレスがある状況でそういうことが起こるのと、素人ながら考えていました。それを何とか克服しようとしている姿なのかと思うようになりました。

小学部の子どもたち。ある男の子は登校してくると「校長先生！」って抱きついてくる。けれど、なかなか周りの人と一緒に行動ができない。ある子はほとんど何も言わない、緘黙なのです。選択性緘黙。色々な刺激で急に喋るようになる。特にこの子は企業のマークが大好きで企業のマークを指しながら、「これは」と言う。ずっと言い続ける。そうやってだんだん物事を覚えていく。自分の興味関心のあるところから覚えていくということがわかってきました。

保護者教職員の姿ですが、状況を受け止めた保護者は強くて明るい。うちの学校ではほぼ全員が状況を受け止めています。強い保護者さんが多いなという印象を強く持っています。父親も非常に熱心で、今の状況からどうやって作り上げていくかを本当に客観的にわかっている。

他人事ではなく自分のこととして想像されると、例えば博物館に障がいのある人を連れて行くかどうかという対応をしたらいいか、街なか

お願います。

小林

お話を聞きする前に、展示室をみなさんと回ってみたいと思います。短い時間ですので、展示を見るといふよりは施設を見る目線でご覧ください。その上でここがもう少しこうだったら良いみたいなことを後半のディスカッションでみなさんからお聞きします。林檎や柿やみかんもございまして、気軽にみなさんと茶飲み話のような雰囲気であればと思っております。よろしくお願います。

館内見学

小林

それでは、ディスカッションに入っていきます。新井先生からよろしくお願います。

新井

特別支援学校から インクルーシブな社会を考える

はい。よろしくお願います。紹介をいただきました福島大学の新井浩です。いつもは学生に美術の一ジャンルである彫刻を教えています。私自身は木彫、木で人を作ったり、動物を作ったり、いわゆる具象彫刻をやっています。

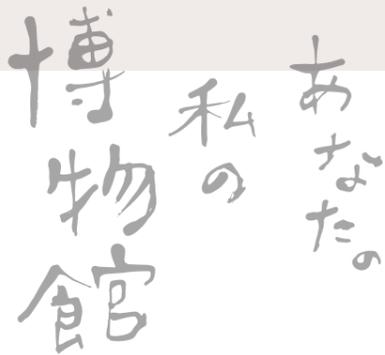
本学の場合、附属学校は大学附属になっておりまして、そこに派遣される校長は人間発達文化学類から教員免許を持っている先生、あるいは経験が10年以上のベテランが派遣されることになっています。フラットな組織です。

で会ったらどう対応したらいいのかがわかると思います。低学年でよくぐずる子がいますけど、平気で受け止めています。暴れてもぐつと抱きしめてあげて、子どもは腕を振り回すこともあるんですけど、ぶつかって多少痛くても平気。高学年になってくると粘り強く、それから強く厳しくルールを教えます。繰り返し、繰り返し教えます。

教職員はだいたい1人に3人の子がいます。2人でクラスを持っている、教員2人でクラスを持っています。小学校の1、2年生が一緒、3、4年生が一緒、本校の場合ですけど、チームで動きますから、どっちかがやるともう一方がやらなくて済む、という関係で利害関係が発生して2人の間の人間関係は必ずしも良くないそうです。けれども、大事な時に連携しています。それから教職員は朝、保護者から子どもを預かって夕方お返りするまでずっと一緒です。本当に疲れていると思うんですけどよくやっています。

それから最後、教職員は大抵のことには驚かない。まず子どもたちを受け止めて行動分析をして、それに対する有効な手立てを何度も試みます。保護者と常に朝と晩に情報交換して、今日こういうことを働きかけたからこういうことができました。それは学校だからできるのか、家庭だからできるのか、それぞれが試すようなことをやっています。

続いて支援に必要なことですけど、こういう障がいを持った人たちに必要なことは何かというところ、自分の感情を出し、言葉にすることが苦手な子、じっとしているのが苦手な子、刺激的な音や色が苦手な子。



私は高等学校で15年間教えたものですが、荒れない小中高は掲示物がたくさん掲示してあるよと教わった。だから、美術の先生も廊下にいっぱい掲示しなさいと教わった。でも特別支援学校に行くときそういうのが刺激になって来られなくなる子がいるから、様子を見ながら掲示しようということになっていますね。それから、中には口内刺激が非常に過敏な子がいて、食べられるもの、食べられないものがある、修学旅行に小中高と3度引率しますが、必ず色々なバリエーションのある、食べ物を選べる所を選んでいきます。

啾啄の機を捉えた働きかけ

博物館というテーマをいただいているので、2番目にいきますと、多面的な働きかけ、子どもたちが能力を上げていくためには言語だけではなくて、実体験を通して色や図を使って教えていくことも大事だということがわかってきました。教室内の掲示は工夫していますね。で、口頭注意だけではなくて、次はどういう行動をすべきなのかを全部掲示してあります。

それから個々の机の上に今週の目標が貼ってあって、それができるまでずっと貼っていたりします。そういうのを目で確認して自分のやることを理解している様子がわかる。それから指示確認。粘り強い働きかけで、一つ一つの行動を時間かけて身に付けさせます。一度身に付けたことは、子どもたちは働く場所に行っても教わった通りにやりますから、一般の健常な人よりもよほど丁寧に仕事をします。それから啾啄の機を捉えた働きかけですけど、ちょうど良いタイミングで

時：10月27日(日) 14:45～16:45
場：福島県立博物館 実習室
師：新井浩氏(福島大学附属特別支援学校校長/福島大学人間発達文化学類芸術・表現コース教授)
上島雅彦氏(財団法人竹田綜合病院精神科科長)
久保田翠氏(認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ理事長/ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員)
会：小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)

司

私もそろそろ年回りだなと思いましたが、特別支援学校校長業務ということで、私の妻からは「あなたができるの?」って評価をいただきました(笑)。なぜかというところ、私は全部美術のために時間を使っている、自己中心的な感じに思われていたのかもしれない。私自身は芸術の神様に奉仕しているつもりなんですけど(汗)。

今度は奉仕の対象が変わったということで「子どもたちに何かできるいいな」という思いで、のめり込むような形で特別支援学校に入ってきました。「誰もが学べる博物館」というお題をいただいていたと思いますが、「特別支援学校からインクルーシブな社会を考える」という形に変えさせていただきました。

4月8日から子どもたちの姿を見ていますが、自立に向けて本当に一生懸命。一人としてばやいている子はいない。本当に一生懸命。小学部から高等部まで12年間育つ姿が見える。中程度の知的障がいの子ですから、小学校1年に入った子が12年間で変わっていく、本当に教育の姿が見える学校で、これは良いところに来たなと思えました。

能力も凸凹

それから、私は職員の中で一番の初心者ですけど、障がいは個々に異なっていて、能力も凸凹に持っているというのがよくわかりました。対人関係が上手いかない子もピアノが上手だったり、ダンスが上手だったり。それから時計について異常に関心が強くて、行った先々でまず時計を見つけて、あの時計とあの時計は2秒違う、それがすぐ分かる。そういう子

働きかける。例えば博物館さんであつたら興味のある部分があればそこで働きかけるということが大事な。素人考えですけど。

ある小学5年生は恐竜が大好きで、それまでも書けなかったのですが、恐竜の図鑑を見ているうちに恐竜の絵は全部空で描けるようになりまし。同時にそれがペトラノドンなのか、ティラノザウルスなのかがだんだん書けるようになる。字も平仮名ではなくて片仮名から覚えるようになりました。ただ「三」だとか、右左が違うことが多いです。そうやって興味あるところから理解が深まっているようです。

学校と家庭の連携と情報共有は先ほど申し上げたように学校で試したことを家でも試す。家で上手くいったことは学校で上手くいくかどうかをもう1回試すことを、毎日のようにやっています。例えば様々な新聞紙で変身、お互いに服を作ってみた。それから自然体験学習で檜枝岐歌舞伎の化粧体験をしました。先生のアクションが強いんですけど、リードして表出させるようにしています。この画像は中学部の3年生、2年生です。宿泊所まで一列になつて歩くので、通りかかる車の人たちはびびったり。

個々の人格を尊重すること

まずは個々の人格を尊重することが大事だと思います。弱肉強食とよく言われるのですが、むしろ適者生存の世界ということをよく特別支援に関わる人は言います。適者が生き残るのであって、人口の10%を超える人たちが障がいを何らかの形で持っているという世の中でそれが今でも維持していける、さらに32位になってしまった。学力テストに関係することだけやっていても能力は上がらないのです。色々な教科、あるいは人格形成、道徳を下支えにして全体的にレベルアップする。

同じ2002年の英国では、クリエイティブアートナーシップを始めた。創造的な能力の育成、教育の変革を目指して、アーティストやクリエイターが学校に行くようになりました。音楽や美術だけが上がると思っていたらそんなことなく、参加児童生徒の母国語、例えばイギリスですから英語、数学や理科が向上したという事例があります。

それから日本でも最近美術大学の先生が取り組んでいます。美大の学生が描いた絵を中学校に持って行って、朝10分間程度の鑑賞をする。そうすると、もちろん美術鑑賞の能力も高まるのですが、いくつかの教科、別の教科の能力が高まる。明らかに数字として上がる。

能力というのはどこでどうやって繋がっているかよく分からない。我々は多角的に支援しなきゃいけないということが私自身わかってきて、みなさんにそういったお話をするのが私の務めと思えました。今日はこんな感じ。ちょっと長くなって恐縮です。

小林

とんでもないです。先生ありがとうございます。続きまして上島先生よろしくお願いたします。

上島

自己紹介から始めようと思っっているのですが、会津に来て20年、生まれは熊本県です。

広げるということが大事だと私も考えるようになりまし。

障がいは多様性ということで、多様な人たちがいることをまず理解する。一人一人は本当に幸せに生きたがっている。その様子をくみ取れたことは私にとつてすごくプラスだったと思います。人格を尊重した後、個々の障がいへの理解ももちろん大事で、合理的配慮ということが最近よく言われるようになり、それは国際条約で決められている。「合理的配慮とは障がいが他のものと平等にすべての人権及び基本的自由を共有し、または行使することを確保するために必要かつ適当な変更及び調整であつて、特定の場合において必要とされるものであり、かつ均衡を失した、または過度の負担を課さないものをいう」と定められています。

何らかの障がいを抱える人は人口の10パーセントを超えているということを知り、ちょっとびっくりしたので、インクルーシブな社会を作っていかなきゃいけない時代が来たと思っっています。

IQでは測れない

美術からものを見て、障がいを抱えている人、一般のいわゆる健全な人たちもみな凸凹なのだとすることがよくわかってきました。美術に最近風当たりが非常に強くなってきて、どうやったら美術や美術教育が生き残れるのか考えた時にM1理論という考え方に触れた。で、M1理論というのはマルチプルインテリジェンスということで、人間は8つの能力を実は持っている、単一のインテリジェンス、IQでは

小林 熊本のみかんです。みなさん召し上がってください。

上島

よろしくお願します。東京に7年ぐらいいたのですが、文学部に行き、子どもの絵本を作っているホルプという出版社をご存知ですか、あそこに1年間いました。で、色々あって、やり直すことになり、それから会津に、福島に来たのです。ちょうど昭和天皇が崩御される冬の寒い時でしたから、昭和64年。福島に来てもう31、32年になります。会津に来てから20年ですね。平成10年に来ました。

小林

竹田病院にその時来られたのです。

上島

双葉厚生病院、双葉町に2年間ぐらいいて、その後は会津に来た。会津には縁も所縁もなかったのですが、ある先生が何か仕事しようねって言ってそのまま。つい今、ラーメン食べていたら隣にその先生が来て、びっくり。これから博物館に行くって話をしていました。

小林

上島先生からこの数年間竹田総合病院でやって来られた活動についてお話を聞きたいします。

上島

あらためまして竹田病院の上島です。今日はお招きいただきありがとうございます。私

測れないってことです。論理、数学、物理学、視覚、空間、内省、対人、言語、語学、身体、運動、音楽、リズム、この八つのうちの二つか三つで社会と切り結んで生きていると言うのです。ですから、二つか三つ能力を身に付ければ社会と渡り合っている。そう考えるとみんな凸凹ですよ。それ以外五つか六つはなくていいというわけですから。

けれども、そういった人たちがどの能力で社会と切り結ぶことができるのか考えるとみんなに必要な多面的な支援、教育は必要で、例えば実技であれば音楽、美術、体育、家庭科、技術がちゃんと受けられる学校がいい。今、効率優先ですから、どうしても5教科でテストの点を取るのが期待される。しかしやっぱり *me to be*、より良い生き方を追求したほうが世の中幸せになるし、それこそが効率の良い社会になると思っっています。

学力テストに関係することだけやっていても

図工や美術の観点からすると、アメリカで2002年にブッシュ政権下でNCLB法というのが作られました。No Child Left Behind、どの子も置き去りにしない法。学力テストに関係する教科を徹底支援して、それ以外の教科や人格形成、道徳の教科を軽視する。なぜそういうことをやったかという、2002年のPIASA学力調査でアメリカは世界18位だった。これはいかにぞとなつて、2002年からこれを始めるのですが、2009年のPIASA学力調査では上がると思っていたのにガクンと下がってしまった。

は新井先生のように資料を作れなくて、今のような自己紹介をしていくと少し何か私の経験をみなさんにお伝えできると思っ。きれいな写真をお見せします。去年イタリアのポロニーヤに行つて撮った。お話が出てくるかもしれない。

「近所博物館、博物館は体験と交流の場になりえるか」というお話をいただいたのですが、確かに竹田病院はここから歩いて10分ぐらい。とても近い。近ければいいかってことですが、少し自己紹介をしながら私の仕事のお話をしようと思っ。今お話したとおりで竹田病院は総合病院で内科や外科の科がある中で、精神科ですが、内科外科など含めて約830床ある。その中で精神科の病床、入院されるベッド数が1500ぐらいあるのですよ、多いですね。ところが10年前は2500ぐらいあって、日本の中を見てみても、総合病院の中に精神科病床がたくさんあるのは珍しいのです。

治療なのか住んでいるのか

今日のお話と繋がってくるように、精神科病院っておっかない感じがしますよね。どうでしょうね。私も子どもの時にはそう思っていました。なんか違う人が行くのだと思っ。たのですが、今自分が仕事をしてみると決してそんなことはないけれども、なぜか長く入院していらっしゃる方がいる。びっくりします。10年、長いと30年ですね、もうそれは治療なのか住んでいるのか分からなくなりますよね。そんなことがあつて、竹田病院はベッドを減らしましょうと、私の仕事の一つは地域移行という病院から地域、自分の好きな家や町に帰っていくとい

オープンディスカッション

あなた、私の博物館

う仕事。私は10数年やってきました。けれど、実は日本の中にはまだまだ長く病院の中で治療というか、暮らしている方がたくさんいらっしゃるって、何人ぐらいの方がそういう状況にいらっしゃるのか、想像つきますか。少し減りましたけど27万人ぐらいいるのです、病院の中に。それはどれぐらいの規模かというと、内科、外科、色々な入院しているベッド全部の5分の1が精神科。もつとびっくりすることには、全世界、話が大きくなるのですが、全世界の精神科病床の5分の1が日本に集中している。

小林

どういうことでしょうか。

ヘンテコな現状

上島

おかしいですよ。日本だけそういう治療が必要な人がたくさんいるかというと、決してそんなことはない。つまり、何か考え方や処遇、待遇が日本は特殊だった。ちょっとだけ言う、と駐日大使が精神科に通院している少年に刺された事件があつて、そのためにおかしな人、危ない人は病院の中に隔離しましょう、社会を守るために危ないよ、変わった、変な人は病院の中に隔離しましょうという体制が進んできて、しかも国はあまり金を出したくないからかもしれませんが、民間の病院が作つてという特例を出して、どんどん日本の精神科は増えてきた。そんなヘンテコな現状になっている。それが1960年ぐらいからのようですね。

一方で外国を見ている。さっきイタリアの写真をお見せしましたが、外国を見ているとむ

しろ逆です。そういう施設がだんだんだんだん減ってきていて、イタリアは精神科の病院はゼロ、無くしました。じゃあ、その人たちは一体どこにいるかということ、街で家に住んでいるわけですよ。

つまり自分自身に病状だとか、障がいだとか、さつき新井先生が凸凹とおっしゃったように、その人の特徴特質はそれぞれある。それに合わせていけばいいという発想になって、街に住んでいらっしゃる。でも、なかなか日本の精神科はそこが変わっていかない。憂いている一人というわけではないですけど、何とかならないかというのが私の今の気持ちです。で、退院を進め、地域移行をしようという仕事をしていったんですけど、最初は僕もその10年、20年入院していた人をやっとお家に戻せました。家族の方も最初は大変でした。10年、20年もいなかった方が戻ってくるのは大変なことで、本人はもっと大変ですけど、家族の方も急に20年間いなかった人が戻ってくるのです。もう親の世代から代わって、子どもの世代になって、あんなおじちゃんがいたのか、知らないという人が戻ってくる。本人から見るともっと大変で、昔の黒電話しか知らないわけですよ。黒電話じゃなくて今はスマホ。駅に行ってもピビと触って。

小林
切符じゃない。

病院の仕事だけではない

上島
あんなので買わなきゃいけない。どうやって切符買ったらいいだろうっていうぐらいに

く場所や環境を作っていく。それを、もしかしたらご本人やご家族が諦め気分になっていこともありますけど、私たちがその方の希望や回復を信じていくことが必要かと思えます。

開かれた精神科医療

その時に、ではどこに。例えば自分の生まれた家庭に戻る人もいます。いや俺はアパートがいいという人もいます。やっぱり一緒にいいから共同住居がいいという方もいるでしょうけど、どこに大切な場所や時間、一緒に過ごす人を見出していかかがとても大事なことになる。すごく漠然とした話をしていますが、本当にそう思っています。博物館の方たちと一緒に話す中で「開かれた博物館」という話があった。でも、僕の経験も本当に「開かれた精神科医療」なのです。

博物館は建物で、精神科医療の医療は行為。だから、ちょっと食い違って嫌だなと思っているんですけど許してください。精神科もそういう鉄格子の嵌っているような病院、建物だけではない。今は鉄格子がなくなりまして。なくなりましてが、建物だけではなくて誰でもが入って来られる、もちろんプライバシーは大事で、治療の中の個人情報、プライバシーは守りながら、でも私たちがやっていることは特殊なことではなく、治療を受けている方も特殊な方ではなく、当たり前前に接していくことが大事、それが開かれた精神科医療。

何がそこに必要か、今日の思いつきです。例えば色々な博物館にしても精神科医療にもも利用するには情報、リテラシー、物事にアクセスして知識を得て、こういう建物がある、博

変わっている世の中に戻ってこないといけないので、まるで浦島太郎みたいな感じ。それをやってきた中で10年、20年も入院していた方がやっとな退院できて良かった、俺ってすごい仕事やっていると思っていたらとんでもない話。今までその方たちが戻るべきだったのになぜ私たちはこんなに遅くなっちゃったのかと、逆に申し訳ない、すまない、そういう感覚が出てきました。

私は病院の中で仕事をしているんですけど、病院が治療を一生懸命にやって、ご本人が良い状態で戻れるっていうのは病院の仕事だけではないです。長年治療を受けていても、先ほどの凸凹、その人の特徴、特質や場合としては障がいをお持ちのままの方もいらっしゃいます。慢性の方もね。だから、そうであっても戻れるためには色々な手当が必要です。受け皿という言葉だけではとてもとても足りないし、私はあまり好きではないです。

住まい、お家かもしれないし、グループホームみたいなものとか共同住居みたいなものとか色々な形がありますが、住まいにしても、食事にしても、対人サービスにしても色々なものが。必要。私は偉そうなことを言っているけれども、とても病院の仕事だけではできなくて、色々な職種や領域の方が必要。そこがあって初めて地域で生活することだと思っています。もう医療だけでは物足りない。

もちろん命が一番大切なもので、それだけではなくさようにしないといけない。と言って、とりあえずご飯食べてパンだけで生きるというわけでは人間ないですよ。食べて安楽に生活はするけれども、加えて今日楽しかったとか、博物館に行ったら変な話を聞いて面白かつ

博物館にはこういう人たちがいて、こういう展示があって、こういう利用ができると知ることがまず必要です。けど、知っている人と知らない人がいますよね。今日こんな催しがあることを理解していただいたのは良かったと思います。ですけど、まったく知らない人は何をやっているのか分からない。これは精神科病院も同じです。

それは例えば、精神的、知的、身体的状態にもよるでしょうし、博物館や精神科の病院から情報を出す、出さない、出し方という要素もあるでしょう。あるいは、今はインターネットが発達しているの、そういう環境的な要素もある。それからそこまで移動するアクセスとか、そういう色々な活用するまでのリテラシーに格差があるので、それを埋めていく必要がある。

その人そのものの問題 だけではなく 周りの社会と関係がある

私はいつも思うんですけど、私たちが付き合っている方たちは、どうしても世間から孤立、孤立化されてしまいます。施設の中、病院の中にいる時間が圧倒的に長くなっちゃう。で、実は幻聴とか、精神的な症状、鬱とか、悪化する時は孤立や孤独なのです。それを感じた時に心配で不安でちよっとした物音が変な音に聞こえる、自分を脅かすものに聞こえる。台風の時に一人で部屋の中において轟々と音が聞こえたら怖いじゃないですか。でも、3人、4人いて、何とかやっていけると思えば、やり過ぎるけど、自分がそういう辛い立場に置かれた時に孤立孤独でいたらこんなに怖いことはないで

たなとか、ちよっと良いこと、周りの人と触れ合えた、良い刺激芸術も含めてそうだと思うんですけど、そういう何か深み、豊かさがあった、良かったな、今日一日って、人は思えるのです。そこをどんなふうに考えていけるかがすごく大事。

今までの私たちの連携先は病院同士、医療機関とかお医者さんや看護師さんとか、あるいは福祉や介護はもちろんですけど、それから行政、就労も大事です。でも、就労ありきでもないですよ。それから教育の機関もそうだと思います。こういう方々とお付き合いをしてきたつもりだったけど、これだけじゃ足りないというのが最近の感覚です。

希望や回復を信じて

色々な症状、病状を持っていらっしゃる方は、その場その場で生きつらさを持っていることが多いです。例えば幻聴がある、妄想がある、暴れる。暴れて迷惑かけたらそれは困っちゃうけど、大きい声を出すと、色々なことがありますが、でもそれがなくなればいいということではないと思っています。それよりもその人が良かったなという体験や、周りの方と良い関係を作るということが実はそういう問題を少なくしていく一つの解決のカギなのだろうなと思っています。

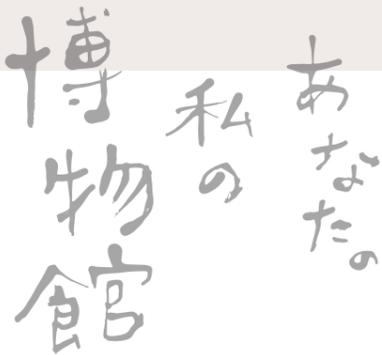
時々ご本人やご家族の方や支援する方が、もうこの人はちよっときついよね、こんな人はやっぱり病院にいてもらわなきゃ困るよねとか言われることがある。でも私たちは、その人は回復していく、リカバリー、その人の強さを生かして、その人が生きて生活してい

すよね。その時に強い症状や障がいが出てしまふ。でも、逆に言つと、病状、障がいはあるけど、周りに安心したご家族や頼れる人がいれば全然構わない。構わないというのもおかしいですけど、幻聴があっても、いや、これはお客さんが来たと言っている人もいます。聞こえるけど、そんなの全然自分の生活には支障ありませんと言ってくれる人もいます。やっぱりそういう症状や障がいはその人そのものの問題だけではなく周りの社会と関係があるということです。

自分の場所、 役割を持てるようになる

それを僕らはどうやって取り除けばいいのか。嫌な経験をした方が多いです。小さい頃から学校、家で、あなたはできません、だめですと言われ、大きくなって社会でダメダメ攻撃を受けて、自尊心が育まれていなかったりする。そうではなくて、プラスの体験をした時にこういうことができて良かったねという感情や体験を積み重ねていくことが大事だと思います。人というのは障がいを持っている、持っていないという話ではなくて、すべての人が自分の場所、役割を持てるようになるかと思っています。

これは余計というか、追加です。障がい者の権利条約、新井先生がおっしゃったようにちよっと調べたら、身体障がいの方が370万ぐらいで、知的の方が75万ぐらい。で、精神の方が増えています。410万ぐらいで、多いのです。でも、何て言いますかね、私たちが上げてあげる側、彼らがされる側という二分法ではなくて、一緒に共同体として住める、共生なんていう言葉がありますが、そうしていければいい。



Nothing About Us Without Us

Nothing About Us Without Us という言葉がすごく印象的なのでご紹介したいです。受ける側、授ける側なんていうことではなくて、私たちのことを決める時に私たち抜きで決めないでくれ。だから、私たちが会議をやる時になるべく本人やご家族と一緒に話し合いをしましょうと言っています。私は今、精神のことでお話をしましたが、精神ってすごく広いのですよ。子どもさんの障がいもそうですけれど、大人になって出てくる病状もあるし、もう間もなく私も認知症の問題が出てくる。これは他人事ではないですからね。いや、正直、父親も母親も認知を持っています。たぶん僕ももうなると思います。というか、なりかけているのかもしれないが、どうやったらならぬのかもしりませんが、どうやったらならぬかというよりも、なったとしても健やかに過ごしたい。だから、それは他人事ではないです。どんなふうに自分のことをちゃんと伝えられるか、伝えられない場合は周りの方がアドボケートと言って代わりに聞き取って伝えてくれることも大事かと思えます。

子どもたちの笑顔、 本人たちの笑顔

私は就労支援事業所に毎月行っているんですけど、そこは就労支援B型です。ですが、地域の小学校とコラボレーションしていて、障がいを持った方も一緒に農業の仕事に関わった

り、学校に出かけて行って一緒に給食を作ったり、食べたり、そんなことをしていて、とても良い雰囲気。第1回のリリー賞という全国の賞をもらわれた。子どもたちの笑顔、本人たちの笑顔がすごく良いので写真をお借りしてきました。これ見るとホッとしますよね。リリー賞第1回もこの就労支援事業所がもらわれた。昨年、一昨年の賞は逆にこの小学校がもらいました。面白いですよね。

今日ここに来る前に近くの栄町教会って野口英世が洗礼を受けた教会、そこでバザーをやっているんですけど、教会で子どもたちが聖歌を歌っている。うちの子たちがそこで歌を歌っている、見て来ました。僕も引っ張られてここに来る前に歌を歌わされてきたのですが、そこにも僕の知り合いというか、利用者さんが来ています。一方的に喋ってくるからうるさい。うるさいですが、例えば病院の中、静かにしなきゃいけない所で喋ったらそれはうるさいと思うかもしれないですが、オープンスペース、教会の外で喋っている。一生懸命一人で喋っている。うるさいですけど、あまり気にならない。周りの方も、そういう人だからと認めてくれているから、喋ってもオッケー。不思議ですよ、制限が強い所に行けば行くほど生きづらさ、暮らしづらさがあるのだけれど、オープンにされればされるほど、色々な多様性を持った方が受け入れられる装置があるなと思っています。みんなで歌えるといいなと思ってきました。すいません私事です。そんなことを考えながら今日来ました。ありがとございます。

小林

ありがとございました。では、久保田さん

わゆる問題行動と言われているものも彼の表現だと思ってやってみたらどうなるか。問題行動はもしかしたら彼にしかできない表現、表現したいなもの。表現とは言わないですね。アーティストが作る表現、要するに作品みたいなものとは、やっぱりちょっと違うもの。けれども彼が一番大切にしている、一番熱心に取り組んでいるもの、それを無下に否定しないということから、「表現未満」って、そういう言葉を作った活動しております。今は駅から800mぐらいいか離れていない所に施設を作りました。浜松市は政令市なので、人口が80万ぐらいいます。中心街にそんなに人はいないですけど、でもわざわざ中心市街地に重度の知的障がい施設を作りました。

ルールに従えないことを武器に

中は障がいのある人たちの居場所、活動場所であり、様々な人たちが来てくつろいでながら色々なことができる場所にしてあります。今日のタイトルでちょっと思うことがあるんですけど、障がい者の施設というのもそんなに来やすい場所ではないのです。みなさんが気楽に行こうと思う場所ではないと思います。やっぱり怖いとか、イメージが悪いと思う。だけどあえて街中に彼らが来た。それで私たちがやろうとしているのは、彼らが社会の色々なルールに従えないことを武器にしながら、外にどんな出かけちゃうということ仕事を仕事だと言いつ張ってやっています。

「のヴァアてれば」などの配信をやってみたり、街にどんな出かけて勝手に路上ライブみた

からお話をいただきます。

久保田 翠

静岡県浜松市からまいりました。私は障がい福祉施設を運営していますが、そもそも障がい福祉施設をやりたいわけではなく、私の子は障がいがある子どもで、特別支援学校に12年間通うような子です。新井先生とこころは中度、軽度とおっしゃったけど、うちが本当に重度の知的障がいの子どもで、彼の誕生によってこういう業界というか、こういう仕事をやらざるをえなくなったという状況です。久保田社（たけし）という名前です。よくお話するのですが、とにかく排泄もできない、言葉もない、それから食事も自分ではとれない、ちょっと動き回るといような人です。23歳になっただけですけど、発語もありません。だから重度と言われる人です。特別支援学校で12年間色々な訓練をやったんですけど、結局一つもできなかった。

本人がやりたいことをやる場所を

私が施設を作った大きな理由は、12年間訓練をやり続けてできなかったものを、またさらに大人の施設になって訓練するのはいかなるものかと思っただけです。なので、何か訓練をするとか、そういうことではなく、本人がやりたいことをやる場所を作っています。で、どちらかというと、その決まりきったことが苦手な人とか重い人が多いです。2階が音楽室みたいなになっていて、音楽を年中やっています。ブルーハーツの梶原さんというドラマー

いなことをやってみたり。寝転がったり、路上演劇祭というのを施設でやったり。色々な方に利用していただきながらやっています。

ともに時間を過ごすこと

特徴の一つ、自分たちで開発したのは、何だかんだと言っても重度の知的障がいの人とも一緒に時間を過ごすことはとても大切じゃないかということ、今「タイムトラベル100時間ツアー」というのを行っています。毎月1回週末にありますので、みなさんぜひいらしてください。1泊2日で9000円ですけど、泊まる所もあります。彼らととにかく時間をどっぷり一緒に過ごすというメニューになっています。

それからもう一つやっているのは、ちょっと名前がまずいですけど「かじしだけし」、たけし君を貸し出すという。たけしだけじゃないですけど、障がいの人たちが出かけていくというか出張するというのをやっていて、私は母校が東京藝術大学ですけど、藝大の授業に呼ばれて出かけた。それから、今日は連れて来られなかったんですけど、自分が呼ばれて何かをやる時に彼らを連れて行っています。「かじしだけし」として借り出してもらおう。先日京都府立芸術大学で学長さんと対談する機会をいただいたのですが、「かじしだけし」をぜひやってください、旅費とか全部持ちますので、ぜひ貸し出してくださいと頼んで、彼と何人かを連れて行きました。

ルールはどこにもない

の方が2ヶ月に1度遊びに来てくれます。

アートNPOという、アートの要素を入れながらやっています。なぜアートというようなものに頼りながらやっているのか。久保田社、私の息子は、今金髪です。金髪にするっていうことはどういうことか。重度の障がいがあっても、施設はさっきの音楽のように、やりたいこと、好きなことをずっとやり続けられる場所です。色々な方から、いやいや障がいがあったって働けるだろとか、訓練をちゃんとさせたほうがいいと言われます。だけどそういうことは一切やっていなくて、息子は入れ物に石を入れて叩き続けるという行為を23年間、2歳ぐらいから1日も欠かさずにやっているのです。特別支援学校でトイレのトレーニングとか食事とかを散々やったけど、やっぱり一つもできなくて、唯一手放さなかったのが入れ物に石を入れて叩き続ける行為です。けど学校とか他の施設では、これは問題行動と言われるのです。なぜかといううるさい、それからこれをやっているとお本当にずっと食べる時以外はずっとやり続けるので他のものが入らない。だからこれは問題行動、だから取り除いて他のものを入れますというふうになっっている。

「表現未満、」

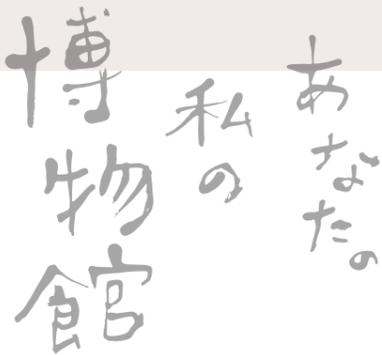
だけど絶対に手放さないということとは、彼が一番大切にしていることが、その入れ物に石を入れて叩き続ける行為だということ。それを問題行動として切り捨てていいのかわからないことを母親としてすごく思いました。なので、この入れ物に石を入れて叩き続けるい

何でこんなことをやるのか。だいたい講義、講義室って生徒さんがバツと座っていて、前に講師がいて話す。これもそういう所かもしれないですが、これってこういう形でやらなきゃいけないっていうルールはどこにもないですよ。で、今日は林檎が出てきたりみかんが出てきたりするじゃないですか。授業とか会議って別に静かにやらなきゃいけないっていう決まりはないけど、そういうものだとみんな刷り込まれているのですよ。そういう時に彼らが適当に荒らしてくれる。で、本当は静かにしなきゃいけない時に石をガチャガチャやったり、スライドを見せる時に前を通り過ぎたり。音楽とかキーボードを片時も離さず持っている青年がいるのですが、彼が急に音楽を始めるとか。そういうことが起こるのです。だけど、それで授業ができないかというところなんです。みなさんが、こういう場なのだと理解すると、何の問題もなく色々なことができるのです。

昨年度、大分の障がい者芸術祭でPROJECTというとても素晴らしい、私の尊敬するNPO法人が展覧会を企画されて、それと呼んでいただきました。私たちだけでは色々な団体のパネル展示があるので、ちょっと展示的なものが欲しいということで、アルス・ノヴァの場所を再現するということを向こうのキュレーターの方が組んでください。

見世物にするつもりなのか

まあ汚い場所です。グシャグシャしていて、それが、こういうところで再現されると、借り物の感じ。これだとあまり意味がないから「か



しだしたけし」で行きたいと言ったんですけど、その時にやっぱり問題が起った。その法人さんが言ったことではないですが、要するに障がいの人を見世物にするつもりなのかと、障がい者芸術祭で、主催者の方々がざわついてしまった。結局その「かじしだけし」は実現しなかった。で、その時に思ったのは、見たくないもの、楽しくないものだと思われている、それを根っこから変えないといけない。

明るさとか無責任、誤解。これは東浩紀さんが「観光客の哲学」でおっしゃっているけど、このライフミュージアムネットワークの根底も同じではないかと思う。見たくないもの、楽しくないもの、見たいもの、楽しいものに変えるって結構難しいです。けれども、そこに底抜けに明るい、馬鹿馬鹿しい、なんか間違えちゃったかなこの場に来るのみたいな、そういうふざけた部分を入れ込んでいくと、人は意外と気楽に来られるようになると思っています。見世物にされたら捉えるのは私たちがいいですよ。私たちが行きたいと言った時、私たちは見世物になりたいから行くって一言も言っていない。受ける側が見世物だと思っただけは本当にただのイメージだと思えます。その時に私たちは当事者なわけだから、何をすればいいかという、とにかく明るくふざけて、ふざけたふりをしながら食い込んでいくことが私たちの団体の一つのやり方、ポリシーなのです。

そういうことが実はここにも大切ではないか。ここはもっと大変だと思う。私たちは民間ですからね、好き勝手なことをやって多少怒られたところでどうってことないですけど、ここはやっぱり公立だから、怒られ度が半端ないと

思うのです。

「ただどこそこはね、ちよつと嘘つきながら、着ぐるみ着ながら、ちよつといい人のふりをしながらコンソソつと変なことをやる。ごめんなさいとか言いながらやっちゃうのが一番大切。そういう気楽な感じが障がいとか、それから公立美術館、公立施設に足りなすぎます。それが社会を息苦しくしていると思います。」

変わるののは社会の方です

精神障がいの人もうちにはいますけど、その障がいの人たちが外に出られないのは社会の圧力ですよ。本人たちのせいじゃないです。本人たちが努力するものじゃないと思う。本人たちが一生懸命に頑張っているのだから、これ以上の努力を強いるなって思いますが。変わるののは社会の方です。みなさんが変われば私たちは好き勝手に出て行けるはず。その時に、今日はうるさい人がいるとか、ここは静かにしなきゃいけない所でしょうとか言うのを一切なくしていただく。ああ、今日はたまたまうるさかったね、今日はちよつと外れだつたかなとか、そういうふうにして美術館やこういう所に来ればいいと思う。そういう気風が育っていないから、みんなが苦しくなって結局、上島先生がおっしゃったように精神障がいが増える状況が生まれてきていると思います。

知的障がいの人たちはわりとそういうことが気にならないのです。人から怒られてもそんなに気にならない人たち。というのもあるから彼らとともに社会に出て、とにかく自分たちの存在を顕在化させつつ、ふざけたこと

をやります。私一人じゃないですよ。私の所にはスタッフが20何人いて、ちよつと社会的には問題を抱えている人たちが寄り集まってくる。その人たちが変なことをやり続けている団体です。はい。ありがとうございます。

小林

ありがとうございます。ここから後半に入ります。テーブルを囲んでお話をしていきます。川延さんが進行させていただきます。川延さんよろしくお願いします。

事務局・川延安直

3人の方の弾丸トークを続けて聞いて、頭の中がパンパンになっています。私は博物館の立場からお話をすることになると思いますが。まず新井先生がおっしゃっていた凸凹ということ。それをいかに当たり前に考えるのが大事なですね。そして久保田さんから最後に厳しいご指摘をいただきましたが、いわゆる公立の問題。公立の「公」が本当はとても大事なはずだけれども、それが逆に圧力になっているというご指摘。

先ほど、展示って見世物みたいというお話もありましたけど、博物館はそもそも見世物小屋だった。万博から始まって、たけしゅんの貸し出しじゃないけれど、実際に人間を展示していた場所。良い施設だった時代ばかりじゃない。みなさんの中で圧力的なもので博物館とかを使いにくかったような、経験、感じみたいなものがありますか。楽しいって言うってくださることもあるけれど、ちよつとどうなのと思うところもきつとあったのではないかと思う。そのあたりのご経験からスタートしたいと思

今後ますます日本社会を息苦しくさせるので、もっと他国に学び、色々な人の意見を大事にするようになると思います。

川延

ありがとうございます。行き来するということ、当たり前と言えば当たり前ですけど、実際はどうでしょうか。

本人を見ていない

上島

今のお話の続きだと、坂本龍馬はもしかしたらADHD、注意欠陥多動性障がいじゃなかったかという話がある。大きな組織の中で、多勢の方がいる中で、人間関係が上手くいって、規則的にできて、でも少しそうじゃなくて新しいものを求め、おそらく両極端に触れる方がある程度は少しいらっしゃる。そういうことがあるから物事がガラッと変革していくという話がある。まさに坂本龍馬はそこにいたのだらうと思っている。僕はずっと憧れているので、あんなれたらいいな。そう言えば自分もそうだなと思っています。

それがADHDという名前がつくと、診断になって、イコール障がいかというとなんかことはないです。つまりそれは病名を見て、診断だけを見て、本人を見ていないことになってしまふ。そうではなくて、その人の良いところを活かしてもらえような周囲があれば、活かされるかなとお話をお聞きしていました。

公立の強みもある

うのです。忌憚のないご意見をどうぞ。博物館に限らなくてもいいです。

自分が参加する、楽しむ気分

新井

お二人のお話を伺って共感するところがすごく多かったです。イタリアのお話をさせていただきましたが、イタリアは学校教育でもフル・インクルーシブです。分け隔てなく公立学校に障がいを持った子どもたちがいる。イタリアの風土がそうさせるのかなと思う。伸びやかで一人一人が変なことをやっても気にしないところがある。

1ヶ月ほど前にうちの音楽の先生が芸術鑑賞教室を開いてくれました。そうしたらうちの中学部の子どもたちが10人ぐらい踊り出した。それを当たり前で受け止めてくれる。後から聞いたら、イタリアでも同じことが起こった。私が歌を歌っていたらみんな出て来て踊ってくれた。こういうのはいいよねという話でした。日本では与えられるものという感覚がやっぱり芸術にしてもあるので、自分が参加する、楽しむ気分をもっと出してもいいと思うのですよ。それは当然だと思います。

話が長くなって恐縮ですけど、一つだけ申し上げたい。創造性の研究をしています。創造性って真剣に物事に向かうだけでは全然ダメで、反対の極、責任と無責任の両極を行き来しなきゃダメ。拡散思考と収束思考両方行き来しなきゃならない。自分の専門の保守性をちゃんと理解しつつ周りのことにも興味がないと、創造性は生まれません。日本の場合はどちらか一方、生真面目ばかり大事にしている。そういう風潮は、

久保田

普通の街中にできたものだから、近隣に学校が何校かあります。歩いて来られる。小学校4年生って校外学習が決まっています。近隣の学校3校ぐらいが校外学習で4年生全員がやって来ます。1校から始めて、それが結構評判が良くて、他の学校を誘ってくださっている。それは私じゃなくて、スタッフが行っているんですけど、まず先生たちに言うのは禁止の言葉を出さないでくださいと。何をやっちゃダメとか、静かにしなさいとか、それ触っちゃダメとか、そういうのは一切言わなくていい。先生はむしろ黙っていてくださいとお願します。そして目撃シートとやったことシートという2枚を渡して、終わったらこの箱に入れて、みたいにする。校外学習なのでそういうふうにするのです。それがすごく面白かった。

うちには一日中ゲームをやっている人とかいる。昔のファミコンみたいなのをずっとやっている人とか、入り口でワーワー言いながらピョンピョン飛んでいる人がいたりする。子どもたちが来て何にびっくりするって、大人がこんなことをしているということを見ながらシートに書いている。大人のくせにゲームしているとか、大人のくせに寝ているとか、そういう意見がすごく多いです。

川延

大人だって寝たい。

違った博物館の在り方が

久保田

だから子どもって、ちゃんとした大人しか見たことがないということらしいです。そういうことを公立の学校はやっぱりやるのですよ。ちよつとした仕組み、禁止の用語を言わないでくれということだけでもだいぶ変わる。授業じゃなくなるのです。だからいきなり来て、フーツと走り回ったりしても、先生は一切ダメと言えない。やってもいいところは言っているから。

色々な引き出しを開けて、ペンを出して一緒に描いて、これを貼りたいとか自分たちから言いだします。それを極力やっつけていいことにしている。何をやってもいい場所だから、極力できないって言わない。そういうことだけで子どもたちはこんなに変わっていくのだった。思った。そういうことをこの場所ですぐにやってみたらいい。その時にアーティストがやったらいいと思いますよ。アーティストを入れてみればいいと思います。

そういうことをやるアーティストも何人もいますから、そういう人たちに校外学習の子どもたちの授業を組んでもらってやってみるとか、そうするとやっぱり違った博物館の在り方が見えてくると思います。

川延

4年生が来るようになったきっかけは学校からのオフアードですか。

久保田

今の場所の前にもう一つ拠点があって、そのほうが長かった。私たちはとにかく色々な人と仲良くなりたいので、その地域を拠点に活動していた時に、近隣の小学校にとにかく何か

一緒にやりましょうと言いに行っただけです。したらたまたまその教頭先生が面白がって来て一緒にファッシュンショーをやりました。その先生が今度は佐鳴台小学校という学校の校長先生になった。外国人が多い学校だから、多文化を教えなきゃいけないのだけど先生たちは教えられる、じゃあレッツに相談してみようという事になってお話があった。そういう二編。その校長先生がいなかったらできなかった。来るまでには3回ぐらいの段階がありました。最初は一緒にコンサートをやる、学校に遊びに行くということから始めています。で、いよいよ来てみたらどうですか。

川延
新井先生が言っていた啾啄のタイミングみたいなものもあるのかもしれないですね。

新井
そうですね。ある程度見込みは必要だと思うんですけど、例えばこの博物館を変えようとした時に、これやってみようかとなったら、もうすぐやってみるのは大事だと思っ。

川延
それが難しい。

鯉のぼりを募集したら

新井
そうですね。これだけの見事な大屋根はそうそうないので、ここで鯉のぼりを募集したらいいだろうなと私は思ったりする。毎年塗り替えるわけではないでしょうけど、すごく予算か

すようなことにも関わっています。

博物館を開かれた場所にするということと同じようなことで、モーグル選手を増やそうとしているんですけど、モーグル選手になってくれる最初のきっかけになかなか入れない。モーグル選手になりたいと思った時にどうすればいいのか。その敷居を下げなきゃいけないということをお試し会という体験会を今年から本格的に始めました。トランプリンでも何でもいいから、今やっているから来て、子どもだけじゃなくて大人もやりたかったら入っていいからと、とにかくまず来て体験してもらって。一番大事なのはやっぱり情報。やろうとしている人たちが、まず入ったことがないから分からないのです。オリンピックを目指すこともないからオリンピックに行けるという現実感も持てない。まずはやっぱり情報とか体験が不足しているの、きっかけをいかに引き出すか。騒いでもいいという日を作って、じゃあそういうのがあるならやってみようかと、わざと仕掛けを投げ込み、入りやすいきっかけを作る。仕掛けとしてはそういうチャレンジ的なもの、敷居を低くしてあげるの、いいのかなと思います。

勝つことばかりでは

私はどうしてもスポーツ中心で考えるんですけど、日本ってスポーツも特殊です。だいたいアメリカでは金メダルを取るのに5年かける。でも日本は金メダルを取るのに10年かける。この考え方の違いはすごく特徴的です。アメリカでは金メダルを取ろうという種目を決めるのはだいたい高校生ぐらいです。でも日本は違います。小学生、下手すると幼稚園ぐらいからこの種目で

かりますよね。

面白そうなものを見たら ワーツと言いたい

久保田
すごく思ったけど、展示としては面白いじゃないですか。きっと子どもたちが学校の見学で来た時に大喜びすると思う。だけどちょっとすいません。先生がいらっしやるから言いづらいけど、だいたい先生って静かにしてって言います。最初にレクチャーがあつて、博物館は静かにする所です。それを一切やらなくて今日だけは騒いでもいい、騒いでも何しても大丈夫だよって授業をやったら、先生は楽かもしれないし、子どもたちが楽しいと思う。

だいたい面白そうなものを見たらワーツと言いたいですよね。でも言っちゃいけないって言われる。言っちゃいけないって言われて、それが守れる子はいいい子なのです。守れない子はダメな子なのです。だいたい発達障がい系の子は守れないですよ。そうするともう悪い子になっちゃう。それはあまりにも切ないと思うのです。

上島
絶対に展示室のバスに乗りますよね。

小林
乗せてあげられたらいいかもしれない。

久保田
乗りたい！ワーツって騒ぐべきだと思うのですよ。乗れないかもしれないけど、だけど乗

金メダルを取るとい道筋に乗らないと取れないのですよ。だからアメリカは、決めるまでは2種類の種目をやりなさいと教える。2種類以上変わったところでは、カナダだと思っのですけど、オフシーズンは自分の専門スポーツをやっちゃだめという、そういうルールもある。アメリカの州によっては全国大会禁止っていうのがあります。子どもの全国大会禁止。それはなぜかという、特化してもうそれしか見なくなるから。勝つことばかりでは子どもの能力が育たない。日本はそこが特徴的で、小さい頃からそのスポーツに特化しないといけないという、敷居を高くし隔離的な考え方でスポーツをやっちゃう。そういうのも見ていて、ある意味共通していると思っ。本当は色々なスポーツを経験して、能力を上げて一流の選手になるという考え方を日本も取り入れていかなきゃいけないと最近やっと変わってきたところ。そういう意味では、博物館をオープンにする話と、発達障がいとか人間の能力とか色々共通する。

川延
ありがとうございます。素晴らしいですね、カナダ。博物館がオフシーズンに使ってもらえる場所になりたいですね。スポーツに限りませんが。

参加者 薄上亮一
私は授産所という福祉施設で半年目です。役場に長く勤めていました。この施設に30人くらい障がいを持った方、知的や精神の方がいます。今回来たのは一つには、仕事をしないとお金をもらえないので、久保田さんにヒントをいただいた、障がいを持った方でも何かお金にできないかな

りたいて声を出さないと博物館は変わらないと思いますね。

川延
そうですね。その声はぜひ聞きたい。それを一つの武器に使う。子どもたちに静かに見なさいって言うと、静かにすることに疲れちゃってね。

新井
「静かにしなさい！」ってすごくストレスになる。私は高校教師の新任の時から15年間それでやってきて、これはダメだと思っ。この20年間、「静かにしなさい」って言ったことは1回もないです。300人の教室で最初の数分、1、2分で静かにさせるにはどうしたらいいか散々考えました。そこにいる人に話しかけるだけでいいのです。人間って猿なので、あれ先生何かやっている。面白そうなことやっているぞってみんな注目する。そうすると静かになって、そこではじめてこんにちはと始めると、スーッと入っていきます。

川延
今、小林さんは果物を剥いていたから静か。
入りやすいきっかけを

参加者 高久博
猪苗代町から来ました高久と言います。今日の話は発達障がいから始まって、よくよくテーマを見ると博物館の話だった。私は子どもが3人います、2番目が会津支援学校に通っています。そういうこともあって発達障がい、知的障がいの子との付き合いが結構ある。そういう子にスキーを教えています。オリンピックを目標

という助平心があった。お貸ししますではないですけど、専門家発見事業というのを役場でやったことがあります。障がい者発見事業みたいなのをやれたらいいなということをお本当に思っ。そして施設の良さとか悪さを見てもらったらいかなということをお考えました。

健常者なり一般の人たちの ザルで掬われたもの

仕事のことですけど、私は役所から来たので、ちゃんとしてよう、コンプライアンス守ろう、正しく教育しようという考えだったんですけど、現場に入ってみると、そういうことじゃなかった。現場に学ぶことはすごく大事。体系化されたものとか、そういったものは1回捨てないとだめだと思っ。現場の人問って目でわかったり、仕事でわかったり、それだけです。理屈、知識があっても敵わないというか、現場対応ができない。それで終わってしまうのがとても残念で、それを何とか形にしたい、永続的な形にしたいと感じています。久保田さんはヒントになった。考えてみると、今まで体系化されたものというのは健常者なり一般の人たちのザルで掬われたものしか残ってないですね。

上手く表現できないですけど、縄文の人たちは何をやってたかわからない。それはむしろ障がいのある人たちがわかるのではないか。それを健常者なり我々がどう掴んで、価値あるものにしていくか。障がいを持っている人たちは、体系化されたものを疑ってかかるといことを提起してくれていると私は今つくづく感じたりするわけです。

オープンディスカッション

あなた。私の博物館

川延
ありがとうございます。ぜひ西会津の授産所さんとは継続的に付き合いして勉強していきたいと思っ。

参加者 岡部兼芳委員
猪苗代にありますはじまりの美術館の岡部と申します。ライフミュージアムネットワークの実行委員会の席にも加えていただき、こういう勉強に参加させていただきましてありがとうございます。はじまりの美術館は、知的に障がいのある方の支援を主に担っている社会福祉法人が母体です。私もそこで勤めていました。比較的重度な方、入所して生活されている大人の方の支援を10年ぐらいしていました。その後、美術館をやるから異動しろと言われて、何と申すか、自分分がなぜこんなふうになっているのかをいつも考えながら仕事をしています。

美術館って何だろう

美術館って何だろう。先ほど博物館は万博からだったというお話があった。美術館も最初は驚異の箱という貴族が世界中からコレクションしたものを知人に自慢するために開いたシークレットの場所が美術館だったと聞いたことがあります。博物館も美術館もお金持ちが面白がって集めたものを見せびらかすところから始まった。社会的に弱い立場とかじゃなくて、お金を持っている大人が作ってきたものを最初のベースにしている。それがだんだん開けてきた。実は今まで自分たちが思っていた価値観を揺るがすもので、自分たちのルーツかと思われるものを集め

ていた。何かを確かめ、可能性を開くためにコレクションションしていたものじゃないか。それが限られたお金持ちのもとから解放されて公になった。

今、公立で運営されているというのは弊害の話も多かったですけど、見方を変えたら広く色々な人に行き渡るようになっていてという望ましい方向に行っている。それがそうじゃない状況に今なっているのは、何かこうあるべきみたいなものがずっと踏襲されてきて、こうじゃないといけないという型にはまったものがベースとして考え方に長く残ってきちゃったのかと思う。

でも、それが持っている価値、みんなが共有すべき意味合いには大事なものがいっぱい詰まっている。だからそういうシステムを維持してきた。今のお話で、それが色々な人に広く使ってもらえる場所になるべきだと考えているところ

に意味があると実感しています。
自分たちが今美術館をやっているので、美術館って何だろうとずっと手探りでやってきました。規模も限られているので、できることも限られている。だけど美術館という名前のもとに何ができるのか、ずっと自分たちは悩んでいます。こうあるべきというのをまずは取り払う。みんなが共有すべき価値がいっぱいある。それを最初のベースにする。そこから考え始めるともっと色々な人が使いやすい場所、来やすい場所になると思います。

川延

ありがとうございます。

公を、本当に正しい意味での公を3人の先生の方も借りて取り戻すための時間だったと思います。何せここは公立なので5時きっかりに閉まります。

ということで大変な残惜しいですが、最後に一言ずつ頂戴できますか。

新井

本日はお聞きいただきまして大変ありがとうございます。文化、福祉は強要されたり啓蒙されたりするものじゃなくて、より良いあり方、生き方がみんなの中に育ってほしいのかなと思える会でした。ありがとうございます。

私たちが常に

会話を続けること

上島

ありがとうございます。私たち、結果はまだ分からないけれども、途中の段階でご本人たちを含めて声を聞き、対話することが大事だと思いました。それがもしかしたら公的なものも動かしていく力になるかもしれない。最近、流行りでオープンダイアログなんて言葉があるので、やはり私たちが常に会話を続けること。答えはその場では出ないかもしれないけれど、地道に対話を続けて双方向になるようにしていくのが大事かなと思った。今日のこの会がきっかけになったらいいと思いました。本当にありがとうございます。

想像しないとわからない

久保田

ありがとうございます。こういう話はだいたい障がいのある人たちがどうやってそこを

使えるようになるかっていう話が多いですけど、そうじゃなくて、今日の話は、そもそもあるシステム、固定概念を障がいの人たちがどうやって変えていけるかみたいな話に少し及んだような気がしています。そういう捉え方ってやっぱり新しいというか、いいな。それこそが本当にソーシャルインクルージョンだし、インクルーシブ。

つまり使いやすいものというの、そもそもは健常者の価値観ですよ。もう一度、障がいの人たちの価値観で全部の物事でなくてもいいから考えてみるというのはとても、さっき先生もおっしゃったように想像力を高める。想像しないとわからないところがたくさん出てくる。そういうやり方もありだなと思いました。ありがとうございます。

川延

どうもありがとうございます。2時間あったという間でした。また機会があればぜひこういう場を設けたいと思います。その時もぜひお集まりください。今日は長い時間ありがとうございました。

時間をもっともっと欲しいと思いました。“生きづらさ”についても少しお話しできるとよかったです。(郡山市、30歳代)

知人につられて意識なく参加しましたが、なごやかで、パワフルな会でびっくりしました。博物館がこのような会を行っている事におどろかされました。自分が知らなかった世界を知る事ができて勉強になりました。(福島市、40歳代)

精神科の看護師をしていました。社会的入院を解消すべく、訪問看護に携わってきました。その中で「なんで今まで入院しか方法がなかったのか」と思うほど社会に入れた方もいましたが、残念なことにさらに悪化したり自殺する方もいました。その差は常に寄り添う味方がいるかどうかがあったと思います。現在は老人福祉施設の機能訓練指導員をしています。先生方のおっしゃっていたようにひとくくりで人はくくれず、皆がちがうということを実感しながら行っています。何もしないと眠ったり、動き回ったり、トイレ頻回の方が多いのですが、集まって、歌ったり、話をしたり、手を動かしたりしていると、あっという間に2H過ぎてしまい、老人のパワーはまだまだ捨てられたものではないです。美術館、博物館が利用できれば、もっと自分たちも利用者たちも!!です。認知症の方々と共に「認知症予防」をやっているところです。(福島市、60歳代)

地域の方と県外で先進的な事例を行われている方と、バランスのよいゲストだと感じましたが、みなさんの事例を伺うにはお一人ずつのお時間は少し短いように感じました。概念や思想を共有する場を大切にしつつ、じゃあ、今日から何を始めるか、変えられるか考えるようなフィールドワークを様々な人と一緒に博物館という場でぜひ行って、1つずつ変えていきたいと思いました。(猪苗代町、20歳代)

種々考えさせられた内容だった。(福島市、70歳代)

あなたの、私の、博物館

オープンディスカッション